

あの時の野球とあの子どもたち

目

次

第一章 共感 ..... 1

ゼロからの出発	1
高校野球	10
四月	20
捜索	24
グラウンド作り	36
ダイエット	42
退団	51
虎担	55
面談	60
サヨナラ負け	69
ジム	74
伊勢の乱	83
緘黙	91
補強	98

安堵	十八年前	一言	助監督	監督	拠り所	信頼	乱れ	病	安らぎ	心の中	迷い	不安	雄作	義人
243		223	209	201	193	184	178	167	156	148	135	124	117	105
	233													

.....

あとがき

奇跡	女神	自己表現
265	258	253

あの時の野球とあの子たち



## 第一章

### 共感

#### ゼロからの出発

二〇〇六年九月十五日の夜七時、私は谷沢健一監督と待ち合せている東京駅にいた。

明日、日本選手権千葉県予選が新日本製鉄君津球場（現 日本製鉄君津球場）で行われる。明日は第一試合で、千葉県君津市まで、当日移動では間に合わないため、前泊することになった。監督が待ち合わせ場所に姿を見せた。

「久保田君、ご苦労さま。今日の生徒さんの大会はどうだったかな」

「おかげさまで、勝てました」

「そうか。それはよかったな。また連覇の記録を伸ばしたね」

「はい。生徒が頑張ってくれました」

私はふと昼間の東京都養護学校ソフトボール大会で七連覇を達成した瞬間を思い出す。

「あの野球をやりたいてって言っていた子……」

「はい。藤木剛です。今日も大事なところでホームランを打ってくれました」

「そうか。それはよかった。久保田君もほっとしたよね。本当にご苦労さま」

「はい。剛も少しずつですが、すぐに怒ることも減り、物事に耐えられるようになってきました。ソフトボール部の仲間に恵まれたのも大きかったと思います」

「そうか。藤木君、一度、うちの練習にでも連れてくればいい」

「はい。剛は硬式野球をやりたいと、毎日言っています。一度チームの練習に連れて行きたいと思っています。その時は、よろしくお願いします」

私は監督に向かって、深く頭を下げた。

東京駅から君津駅までの約二時間、監督と私は、翌日の先発メンバーの打ち合わせに、多くの時間を費やした。

YBCフェニックスが初参加した五月の都市対抗予選で、○対十七の五回コールド負けを喫した後、野手を中心に七名の選手がチームを去っていた。



もっと、強いチームでやりたい。

チームの方針に合わない。

辞めていく選手は、いろいろなことを言ってきたが、監督は「去る者は追わず」だと、突き放した。

だが、主力選手の抜けたチームは、まさに火の車だった。

まず先発ピッチャーを誰にするかで、守備の要であるシヨートやセカンドのメンバーが変わってしまふ。野球で一番大事なセンターラインが、なかなか決まらない。だが、何としても、予選初勝利を達成したかった。

監督といろいろ話し合い、最終的には監督が先発ピッチャーを決断した。このピッチャーは、サイドハンドから投じるシンカーやチェンジアップが武器で、何よりコントロールがよかった。監督もまずは試合を壊す危険の少ないピッチャーを考えようだ。

この監督の決断で、五月の都市対抗予選で先発したピッチャーにシヨートを守ってもらい、セカンドには、打撃は劣るが、守備の安定した選手を使うことにした。

あとは、もう選手たちを信じるしかない。

翌朝、監督が三塁側ベンチに座り、左中間方向を凝視していた。

そこには、この球場を本拠地とする、企業チーム「かずさマジック」のチームスローガンが掲げられていた。

『ゼロからの出発』

「まさに、今のうちのチームを象徴しているな」

監督が隣に座っている私に話す。

「そうですね。いろいろありましたからね……」

そばで、私と監督の話を聞いていたマネージャーの杉田和也も頷いていた。

杉田はまだ二十代後半と若いのが、とても真面目な男だった。

「監督、ここまでいろいろとありましたが、YBCフエニーズもゼロからの出発でいいじゃないですか。今日は何としても勝ちましょう」

私は語気を強めて言った。

「監督、私も勝ちたいです。今日は頑張りましょう」

杉田も気合が入っている。

「そうだな。何としても、今日は予選初勝利を達成しような」

監督が話を締めた。

試合が始まった。

初戦の相手は、千葉県松戸市のクラブチームだ。

先発ピッチャーが監督の期待に応えて、五回まで三失点に抑えてくれた。相手にヒットは許す

が、四死球を出さないで、大量点を与えない投球を続けていた。

YBCフェニーズは、八回表までに七点を取り、七対三と試合を優位に進めていた。

だが、八回裏に、懸案だった守備のセンターラインにミスが出てしまい、相手に四点を奪われてしまった。

九回表の攻撃前に、ベンチ前で円陣を組む。

主軸の村松優が輪の中心で叫んだ。

「おい、みんな。この回に勝負をかけるぞ。俺は、絶対に勝ちたいからよ。全員力で、勝とうぜ！」

「オー！」選手全員が一斉に大きな声を出した。

(これは、いけるぞ) 今まで見たことのない、選手たちの一体感だった。

九回表の攻撃

九番 セカンドゴロ

一番 センター前ヒット

二番 ファーストゴロ

三番 四球

四番 四球

相手のピッチャーもかなり、疲れが見えてきた。

バッターは五番の村松。

「村！何とかしてくれ！」

私は三塁コーチャーボックスから、大声で叫ぶ。

村松が私を見て、ヘルメットのツバを触りながら、大きく頷いた。

ワンボール、ツーストライクからの四球目。

カーン。

打球がライトの頭上を襲った。懸命にライトが背走する。ライトが背走しながら、ボールに飛び込んだ。

捕ったか？

落ちたか？

三塁コーチャーの私の位置からは、よく見えない。

その時、判定のために外野まで走っていた二塁塁審が、大きく両手を広げた。

「フェアー」

「よっしゃー」

三塁側ベンチが大騒ぎだ。

「ゴー！ゴー！」

私は右腕を何回も何回も回す。

ツーアウトだったので、打球音とともに、すぐにスタートを切っていた二塁ランナーまでホームインした。

打った村松は、相手の中継がもたついている間に、一気に二塁ベースを回った。

「村！ スライディング！」

私は広げた両手を大きく下に振り、合図した。

村松がものすごい勢いで、ヘッドスライディングをした。

「セーフ！」

三塁塁審が両手を広げた。

「村、ナイスバッティング！ よく打ってくれた。ありがとう」

私は右手で、村松の肩を叩く。

「は、は、はい。よ、よ、よ、よかつた……」

村松は息が苦しくて、まともに話ができない。

九回裏は都市対抗予選に先発したピッチャーがリリーフ登板し、気迫のピッチングで相手打線を三者凡退に抑えた。

「ゲームセット」

審判の声が球場に響いた。

「よっしゃー、勝ったぞー！」

ベンチに戻ってきた選手たちは、チームの予選初勝利にみんなで抱き合い、歓喜の声を出していた。私はこんなに喜ぶ選手の姿を見たのは、初めてだった。

「コーチ、やりましたね。勝って、本当によかった……」

杉田が泣いている。

「あー、杉田、やっと、勝ったな……」

私は杉田とがっちり握手した。

「久保田君、ご苦労さま」

監督が右手を差し出した。

「監督、お疲れさまでした」

私は両手で監督の手を握った。

「これで、やっとゼロがイチになったかな。まだまだ、これからだけだな」

監督は、左中間方向に掲げてあるスローガンを見た。

「はい。監督、明日の試合も頑張りましょう」

明日は、初めて企業チームと戦う。

翌日の二回戦、企業チーム、かずさマジック戦。

一対十、七回コールド負け。

完敗。

まったく歯が立たなかった。

(同じ野球をやっているのに、クラブチームと企業チームは、こんなにも実力が違うのか)

かざさマジックの選手たちは、試合前のアップの時から、全員の統率がとれており、無駄な動きが一つもなかった。また、ユニフォームの着こなしも、どこかだらしなさのあるクラブチームの選手とは違っていた。

試合後、私が球場外で選手たちと雑談をしていると、背後から声をかけられた。

「久保田さん、はじめまして、かざさマジックの〇〇です。今日は、ありがとうございました。私、日体大を卒業しています。今後ともよろしくお願い致します」

〇〇選手は、私に向かって、帽子を取り、深々と頭を下げた。

「あつ、今日は、こちらこそ、ありがとう。わざわざ、あいさつ、すみません……」

私は、びつくりした。だが、野球でしのぎを削っている企業チームの選手は、こういう挨拶は当たり前のようにやっているのだろう。

ふと、大敗したにもかかわらず、チームメイトとの雑談に興じているYBCフェニックスの選手を見た。これから都市対抗本大会や日本選手権本大会を目指すためには、企業チームを倒さなければならぬ。

私は、野球の実力もさることながら、社会人としての資質も高めないと、企業チームには太刀

打ちできないと、強く感じた。

まだまだ、先は長いな……。

## 高校野球

十月初旬の月曜日、私は朝刊の地域版に書いてある、小さな大会結果を凝視した。

多摩ソフトボール大会、一回戦

西部養護学校 七 対 六 ○○ソフトボールクラブ

私が指導している知的障がいのある生徒たちが、初めて健常者チームに勝った。

私は、朝刊の大会結果を見ながら、一人、感慨に浸っていた。

このソフトボール大会は、練習試合で相手をしてもらった社会人チームの方から、大会のことを教えてもらい、初めて参加した。ここまで、都の一般社会人ソフトボール二部大会や練習試合で社会人チームと対戦する機会はあったが、まったく勝てなかった。

過去を遡っても、私が初めて練習試合をお願いした松陰高校女子ソフトボール部に大敗してか